# ガシャポン彼女

新次元

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ガシャポン彼女

【Ｎコード】
Ｎ１４４６Ｇ

【作者名】
新次元

【あらすじ】
究極の美を手に入れたはずの大山だったが、意中の人には感心を持ってもらえない。そこで、その美を更に高めるため、彼女は永遠の美を持つドラキュラ城を訪れるため、ルーマニアへ行くことにしたのだが・・・・・・。通俗ミステリ。どこかショートショート臭い物語を短編にしたようなラヴコメ。
――ＨＰ→ｈｔｔｐ：／／２ｍｉｎｕｔｅｓｂｌｅｎｄ．ｗｅｂ．ｆｃ２．ｃｏｍ／
ｍａｉｌ→ｃｏｎｔｒａｖｅｎｔ☆ｈｏｔｍａｉｌ．ｃｏ．ｊｐ（

☆を@にしてください）

## 最高の改造

大山笠野は、何度も身体を改変した。基本的には自分の頭にある理想を軸に整形したのだが、中には外部から取り入れたところもある。例えば、それは有名なモデルや、尊敬する女優であった。

また、最近人気の高い美男美女のフィギュアも大いに参考にした。それは三百円のガシャポンで、中に封入されているフィギュアはどれもこれも精巧すぎる代物である。話しかければ反応する。片言ではあるものの会話能力さえあるのは、驚きとしか言いようがない。これが受けないはずはなく、女性を中心として社会現を引き起こしている。

このフィギュア、自身を究極の美へ近づけるのに、大変役に立ったのだが、いかんせんシリーズは続々登場する。そのたび、彼女も身体を作り変えた。結果、相当金がかかる。それでも彼女は美にかける金に糸目はつけなかった。

とはいえ、このフィギュアもシリーズを重ねるごとに、アイディアが枯渇してきたようで、ここ最近新シリーズはとんと登場していない。これは、朗報であり悲報であった。

こうして、一応ではあるが、めでたく彼女による身体の改革は幕を下ろした。だが、まだ一つだけ問題が残っていた。時間、というものである。

英語の時制のごとく次々と自身を変え、いくら美しくあっても、時による肌の風化、肉体そのものの老化は決して避けることはできない。

それに気づいてからというもの、ブランド服に身を包む彼女は、仕事を終えてからずっと部屋にこもって、不老について研究した。しかしながら、元々勉強嫌いな上、不老などという大それたものを、彼女が見つけられるはずがない。いや、そもそも『なかった』。

文系である彼女には科学的思考による論理構成は到底理解不能の

領域であった。しかし、霊的、伝説、伝承となると話は違ってくる。
自身やその身なりとは対照的なマンションの一室にて、彼女はドラキュラを利用してやろう、と思いついたのである。文献など全くの無関係であった。
不老を考えていれば、自然と不老不死が思考に転がり込み、そして不老不死といえばドラキュラなのである。少なくとも、彼女の中では。
ドラキュラは、ルーマニアにいる。公用語たるルーマニア語を習得しなくては何かと不便であろうが、ドイツ語もそれなりに使われているらしい。大学にてドイツ語を専攻していたので、少し勉強しておけば、なんとかなるだろう。後は、ドラキュラと会えばいいだけだ。
これでようやく愛しの彼に振り向いてもらえる、というものだ。そう、彼女は今恋をしている。霊崎努という一見ぱっとしない風体の男なのだが、どことなく気が惹かれるのだ。それは、彼のマメさからくるものなのかもしれないし、あの柔らかな笑顔や男性諸君が元来考えている見当違いの優しさの不所持からなのかもしれない。ひょっとすると、社内で唯一彼女の美に興味を全く示さないあの鈍感さかもしれなかった。
好きです、と率直に言えばいいのだろうが、彼女はその考えを打ち消していた。少なくとも納得のいく美を手に入れるまでは、告白できない。いや、告白するのが恐ろしいのである。もし否定されたら、と思うと足がすくむ。自分の美が認められない、ということは、彼女にとって、己の人生を全面否定されたに等しいのである。
社内で、霊崎努はよく咳き込んでいた。大丈夫、と最初は聞いていたが、どうやら風邪ではないようだ。習慣のように、咳き込んでいるのだから。
「大丈夫かって？　君の方こそ大丈夫かい？」
霊崎努に、逆に聞き返されたことがあった。
どうして、身体の至る所にいつ爆発するか解らない――そして爆

発するかどうかも解らない――時限爆弾を自分が抱えていることを、彼は知っているのだろう。
彼女は整形によって美を手にしたのだが、それは誰にも言っていない。整形は、この職場に来る前に全てなしたことなのである。
かつて彼女は美と引き替えに、身体が本来所有する機能的な側面を、全て打ち捨てた。ゆえに、ほぼ全身に渡って、痛みが潜伏している。それらはだいたい眠ってくれているのだが、時たま活性化する。そんな時、彼女はこっそりと痛み止めの錠剤を服用するのだった。
第一、彼女は痛みにたえかねて顔をしかめたり、眉を潜めたりしたことは、一度たりともない。笑顔を絶やさず、他の社員と接していた。
なのに、どうして霊崎は自分の抗えぬ痛みを、認識しているのだろう。もしかしたら、整形という事実をも、知っているかもしれない。
まるで、心を見透かされてしまっているようだった。それは恥ずかしくもあり、自分のことを深く知っていることでもある。整形美人という事実の発覚よりも、彼女の脳内は、むしろそういうことで満たされていた。
こういうことが度重なり、彼女は彼に親近感を覚えるのを禁じえなかった。
「大丈夫かい？」
彼は、やけに大山のことを気遣ってくれるのである。だが彼を食事に誘っても、一向に頭を縦に振ってはくれない。
「今日は用事が……」
などと言い、言葉を濁すばかりであった。もしかしたら、彼は自分のことを好いてくれていないのかもしれない。でも、だとしたら、どうして必要以上に親切なのか。解らない。それゆえに、事実を確かめてみたい。残忍な真実が待ち受けているかもしれないが。

彼女は行動が早い。翌日出勤するや否や、退職届を上司に叩きつけた。
「うん？　ま、まさか、結婚退職かね？」
痩躯の上司が、退職届を恐れ多いものかのように両手で持ち上げる。
「いいえ、違います。私は更なる美を得るべく、ルーマニアへ行くんです」
「ル、ルーマニア？」
職場の男性達が、同時に声を上げた。霊崎は我関せず、といった様子で、しきりに目を擦っている。目が痛いのだろうか。相変わらず、体調は思わしくないようである。彼に声をかけようとしたが、
「ルーマニアで、何をしようというのだね？」
上司が詰め寄ってきたがために、それは妨害された。
彼女は、職場においてもマドンナ的存在なのである。男性が、彼女の虜になるのは無理もない話であろう。なんといっても、他の女性と比べて美を追求する気力姿勢が桁外れに違うのだから。いくら整形美人といえども、男性は美女に惹かれてしまうものなのだろう。もっとも、ここにいる者は、彼女が整形美人という事実を誰も知らない。もしかしたら、それが彼女の人気を底上げする要因の一つになっているのかもしれない。
「ま、待ってくれ！　なぜルーマニアに？　それに、わ、私は決して君の退職は認めんぞ！」
上司が退職届を大山に突き返し、詮ない主張を展開した。周囲の男性社員もそうだそうだ、と同意する。一方、女性社員達はそんな彼らに冷ややかな視線を送っていた。
しかしそんな視線を全く意に介さず、男性社員達は思い思いの主張を撒き散らしている。ここにいる男性社員からしてみれば――いや、全ての男性なのかもしれない――他の女性社員は、大山に比べれば劣等種族にしか見えないのである。

「だって――」
大山が口を開くと、すぐさま男性諸君の激しい主張による不協和音が消え去った。
「永遠の美がそこにあるから。このままだと、私、駄目になっちゃうから」
そんなことない。
断じて。
安心して。
信じて。
もう君は十分に美しい。
男性達はだいたいこういった類の言葉を並べ立てて、彼女の退職の全力阻止に取りかかった。だが大山は、かぶりを振るばかりである。
「ごめんなさい。私、あなた達には――興味ないの」
消え入るような声だったが、その一言で、男性社員達は呆けたように口をポカンと開け、女性社員がそれ見たことかというように、鼻でふんと笑った。
そんな彼らを尻目に、大山は今一度、上司の机に退職届けを威勢よく叩きつけ、そして職場を後にした。ここへ帰る時、それは霊崎努に自分の想いを打ち明ける時だ。

## ルーマニアでぐったりだ

ルーマニアのどこにドラキュラが潜んでいるのか。文献によってまちまちだったため、彼女は現地の人に聞くのが最も効率的に違いない、と考えていた。

飛行機の中で長時間揺らされ、ようやくルーマニアに到着。

降車すると、少し肌寒い。余念なき下調べによって、それくらい知っている彼女は、用意していた上着を羽織った。

しかし、予想外のこともあった。

空港及びその付近は、近代的過ぎて神秘さの欠片もなかったのだ。

彼女の読んだ資料によれば、ルーマニアの駅には中世の面影がまだ残っていた。なので、空港もてっきりそういうものだとばかり思っていた。だが、現実は思い描いていた想像を圧砕するものであった。

このような文明的な場所に、ドラキュラがいるとは到底考えられない。

ひとまず彼女は空港を出、タクシーに乗り込んだ。

「行き先はどこですか？」

ルーマニア語でそう聞かれた。この人は、ドイツ語も話せるのだろうか。

おそるおそる彼女がドイツ語で、それを聞いてみると、

「ええ、解りますよ、お嬢さん。それで、どこに行きます？」

非常に明瞭な発音で返された。

ほっと胸をなでおろし、彼女ははっきりとした発音で、しかし実に曖昧模糊な行き先を告げた。

一瞬運転手は聞き間違ったか、それとも大山がドイツ語に堪能ではないがために、言い間違えたと思ったらしい。すぐに聞き返してきた。

「すいません、もう一度言ってくれませんか？」

「田舎っぽいところへ連れてってください」
運転手は、頬を引っぱたかれたようにきょとんとしている。さすがにこれではまずいかもしれない。大山はそう考え、比較的明確な目的地を口にした。
「ドラキュラのいそうなところが解っているのでしたら、そこへ向かって欲しいんですが」
「ははあ、ドラキュラねえ……」
お客さんもですか、と運転手がヒュウ、とからかうように口笛を吹く。彼によると、この手の客が後を絶たないらしい。三日前にも、ドラキュラのいそうなところへ、という注文を受けたという。
「あなたでちょうど四人目ですよ。同業者も、なんだかんだ言って、あなたのような客を五回ほど乗せたことがあるらしいです。ま、長くなりそうですから、ひとまず出発しましょう」
運転手はエンジンを始動させ、ドラキュラのいそうなところへと車を向かわせた。
「あ、後、言い忘れましたけど、すごすごと帰りなさるお客さんも多い、らしいんですよ」
「え？」
思わず、大野は日本語で聞き返してしまったが、
「いえね、私は人づてで聞いただけなんですけど――」
と返された。
案外、表情や声色で、なんとなく解るらしい。
「なんでも、美男美女がいますぐ病院へ向かわせてくれ、と頼むらしいんですよ。なぜでしょうねえ。ドラキュラに本当に出会って、首筋にでもガブリと噛まれて、出血しているんなら解りますよ。でも、彼らは口を揃えてこう言うそうです」
会うなり、門前払いをくらった。
「いやはや、なんとも酷いドラキュラさんですな、はっはっはっは」

運転手が声を上げて笑うも、大山の顔はみるみる青くなった。
「おや、どうかしましたか？」
「い、いえなんでも……。ちょっと長旅で疲労がたまっているので」
返しながら、大山の頭では警報が鳴り響いていた。
彼女が得た知識によると、ドラキュラは美男美女の血しか求めないのだそうだ。無論、ドラキュラ全員がそうではないのだが、おそらくルーマニアにいるドラキュラはそうなのだろう。つまり、門前払いを受けた美男美女は、ドラキュラの審美眼による美醜検査で不合格の烙印を押されてしまったにちがいない。門前払いを受けた彼らには、ドラキュラと会う資格すら与えられなかったのだ。その美しさが、中途半端だったのだろう。
「しかし、どうして病院なんでしょうねえ」
運転手が左折する時、大山に再度聞いてくる。彼女は、答えを知っていた。その美を更なる高みへ持っていくために、整形手術を受けるためにちがいない、という模範解答を。
まさか。
心臓が大きく拍動し、胸を苦しめる。
磨き上げたこの賜物が、否定されたらどうしよう。
美への飽くなき探求、そして実行を重ねた結果、誕生したこの存在。
認定されないなど論外。
そのようなことが万一起こったとしたら大問題。
「そうそう、もう一つ疑問がありましてね」
運転手が、隣に座す大山に聞いてくる。
「皆さん、例外なく美男美女なんですよね、これが」
運転手が首を捻る。大山と同じ目的を抱いていた彼らは、誰一人としてドラキュラに会いに行く目的を告げなかったらしい。それもそうだろう。一体、誰が真実を口にしようか。
この美を永遠のものにするためです、と言っておきながら、門前払いをくらった暁には、犯罪者のごとく顔を隠して生きていかねば

ならないにちがいないのだから。
「よろしければ、教えてくれませんか？　どうしてドラキュラに会いに？」
「ごめんなさい。そればっかりは教えることはできません」
「でしょうねえ」
運転手は驚きというより、やっぱりかあ、という色の方が大きかった。このような問答を何度も繰り返してきているからだろう。そしてこれからもずっとこの運転手は、その解答を手に入れることはないはずだ。
もう質問攻めにされるのはごめんだ。彼女は苛立ちを感じたので、運転手との会話を切断すべく「失礼ですが、私、とても眠いので、少し寝かせてもらえませんか？」と言おうとした。だが、運転手が清潔感漂う白手袋でそれを制する。
「ええ、ええ、解ってますよ。とても眠たいのでしょう？　どうぞ、ごゆっくりお眠りになってください。着いたら起こしますから」

## 不可解で瓦解

思考が、闇で満たされる深海から水揚げされた。
「着きましたよ、お客さん」
運転手が、もしもし、と言って、大山の肩を揺さぶっている。
まだ闇色の水で湿る思考だったが、彼女は運賃を払い、急いで下車した。そして振り向きもせず、ずんずんと歩いていった。
背後で遠ざかっていくエンジン音に耳を澄ませながら、確かにここは田舎だ、と実感した。
死んだ近代文明。
民家はちらほらとしか見えず、都会と呼ぶには程遠い状態である。
時は夕刻。彼女の思考が明るくなるのとは対照的に、周囲は曇り始めていた。
幸い、懐中電灯を持っていた。支障はないだろう。彼女はよし、と胸の内で、自分を奮い立たせ、手始めに遠くの方でちろちろと揺らめく灯のところまで行くことにした。昼だったら、こうも容易く民家を見つけることはできなかったかもしれない。
なんといっても、彼女は目が悪い。おまけに、その上眼鏡は嫌いだし、コンタクトをつけることも嫌なのだから。そういうわけで、裸眼で視力０・３弱の彼女にとって目印となる灯は大変ありがたい存在なのだ。
「でも駄目よね、このハイヒール」
実用性を完全無視したハイヒール。平均的なハイヒールに比べ、彼女のそれは更に不便性を極めていた。あまりにヒールが高いのである。
今となっては低身長ではない彼女なのだが、それでももっと身長を高く見せたかった。
が、やはり手術にも限界はある。医者の説明によると、踵の部分の骨をどうにかして、身長を伸ばすらしいのだが、あまりやりすぎ

ると歩けなくなるとのこと。
彼女は、その一歩手前まで身長を引き伸ばしたのだ。それがゆえに、走ることはできない。走ると、足が痛む。
「でも、ま、走ることなんてしないけど」
ふふふ、と彼女は笑った。走れば汗をかく。汗は基本的に臭い。これば かりは、手術や個人的努力でどうにもならない。

ゆっくりと歩き続けること三時間。ようやく民家にたどりついた。一戸建てのそれは、やや濁ったような乳白色の壁、煉瓦色の屋根を有している。
扉を叩き、出てきた老女に、ドラキュラ宅の場所を尋ねると、
「ああ、あんたもかね？」
と眠そうに目を擦る。慌てて時計を見ると、夜中の十一時である。こんな夜更けに尋ねるのは非常識極まりないことだが、もう手遅れである。
すいません、また明日にします、と言ったが、いいよいいよ、と老女は人の良さそうな笑みを浮かべた。
「それにね、ドラキュラ城なら知っているよ」
老女曰く、北東に見える山を越えれば、城があるそうだ。かなり大きな城なので、行けばすぐに解る、とのことであった。
実にあっけなかった。何軒も訪問しなければドラキュラ城は見つからない、と思っていただけに拍子抜けである。嬉しさの実感がいまいち湧いてこなかったけれども、やがてふつふつと喜びが湧き上がってきた。
礼を述べ、彼女は家を去ろうとした。
「それより、お前さん、まさかとは思うが野宿でもするつもりかい？」
そのまさか、だった。この近辺にホテルはない。かといって、初対面の人間の家に上がり込んで、寝床を頂戴するという図太い神経

は持ち合わせていない。
「大丈夫です」
そそくさと退散しようとしたが、駄目でしょうに、ほらほら、と老女に中へ入れられてしまった。
「外は冷え込むよ。特に夜はね」
困った人を、放っておけないのだろう。たじたじしている彼女を椅子に座らせ、早速料理に取りかかっている。
そういえば。
ルーマニア人は中欧の中で唯一ラテン民族の血筋を引いており、そのためか人々は陽気で、困っている旅行者を見たら助力を惜しまないらしい。ここへ来る前に読んだ何かの文献に、そう書かかれていた。
開放的で親切な国民性を、ルーマニアへ来てそうそうに体験した彼女だった。
「今日の夕食で食材をきらしてしまってね。温かいスープしか作れないけど、我慢しておくれ」
老女が料理をしている最中、彼女は何度もお礼を言った。
「構いやしないよ。お前さんみたいな美女を外に放っぽり出していたら、野獣どもが放ってはおかないだろうからね」
確かに大山は美女であったが、この美しさは、己の身体を無闇やたらと変更し続けてきた結果の産物である。そう、まるで英語の時制のように。
過去完了形、過去完了進行形、過去形、過去進行形。
現在完了形、現在完了進行形、現在形、現在進行形。
未来完了形、未来完了進行形、未来形、未来進行形。
原形などは、一片たりとも残っていない。
「本当、『皆』無茶ばっかりする人なんだから」
彼女は『皆』という言葉に、どきりとした。この老女も、あのタクシー運転手同様、何人もの美の探求者に宿を提供してきたのだろうか。いや、そうに違いない。

――ああ、あんたもかね？

今気づいたが、この発言も、何よりの証拠ではないか。しかしだとしたらどうしてこの老女は、何も聞かないのだろう。大山は内心で首を傾げたが、それを彼女に聞くのは憚られた。わざわざ自分から聞くこともない。ましてや、それによって老女が質問してきたら、と思うとぞっとする。

「ほら、できたよ」

老女が湯気を立てる碗を、机に置いた。中を覗くと、どうやらかぼちゃスープであることが解った。

「いただきます」

スープを口に運んだ。生姜とニンニクが、ほどよく効いている。この料理も今までの美の探求者達も食したのだろうか。そう思うと、妙にしんみりとしてくる。

自分が本当に永遠の美を、ドラキュラから授けられるのか。

ドラキュラによって、今まで築き上げてきた完璧な美を否定されたら、どうしようか。

「あまりおいしくないのかい？」

そこで、大山は、ふと自分との会話から抜け出し、微笑んで見せた。

「とんでもない。とてもおいしいですよ。よければこのスープの作り方を教えて欲しいくらいです」

「おやおや、そんな爪じゃあ料理もままならないでしょうに」

ほっほっほっほっ、と老女が笑う。

言われてみれば。彼女は自身の手をまじまじと見つめた。

きらきらと光るつけ爪、ペンダコはおろかマメもアカギレもないこの手。

呆れるくらいに美を深追いしている乙女。

これでは家事とは無縁ということが筒抜けである。少々気恥ずか

しいが、これも彼女にとっては致し方のないことであった。何しろ、手は美のままで残しておきたいのだから。

「料理はできるようになっておいて損はないよ」

それは間違いない。彼女はいとしの人、霊崎努のことを思い出した。いつもと違うつけ爪をしていった時に、これどうかな、と聞いたことがあるのだ。

――その爪、綺麗だね。手も綺麗だよ。でも、仕事やりにくくないかな。

遠慮がちにそう言っていた彼の姿が、今はっきりと頭に浮かび上がってきた。彼は、家事を卒なくこなす女性が好き、ということなのだろうか。だとしたら、手を美しくしてきたのは大きな誤算だったのかもしれない。

彼女は、小さな溜息を漏らした。

## ドラキュラ参上の感想

一晩の宿を借り、彼女はまた歩き続けた。店屋物ばかり食べていた彼女にとって、あのスープも、そして出立前に頂いた朝食も、実に新鮮であり、美味であった。

ドラキュラ城までは、後もう少し。彼女は自分を今一度奮い立たせ、しかしゆっくりと歩いた。いくら奮起しても、残念ながら走ることはできないのだ。走れないという美の代償は、思ったより高いのかもしれない。

少し彼女は後悔した。いいや、少しだけではない。かなり、だ。普段から、彼女は身体の節々の痛み、違和感を覚えていたのである。そして不慣れな運動を、昨日から今日にかけて行っているため、ますますひどくなってきているような気がしてならない。

脹脛や腹部が、内部から引っ張られたような痛みがあったし、足は走ってもいないのに、痛み出す始末である。もともと、あまり長距離を歩くこともよくない、と医者が言っていたっけ、と彼女は他人事のように独白した。

鬱蒼とした森の中、それでも彼女は懸命に歩いた。足場は思いもよらない隆起があったり、石が転がっていたり、とおよそ人が歩くに不適な場所であった。

しかし、これも霊崎努のためなら、と思うと、その苦労も和らいだ。

そもそも、いつから彼女は極端な美の探求者になってしまったのか。久しぶりに、その切っかけがちらついた。

昔、それは彼女がまだ自分による自分の改造に着手していなかった頃のことである。醜悪を極める容姿――と大山は思っている――時代であっても、彼女はそれなりに男性との交際を重ねていた。しかし、いつも決まって最後は別れ話を切り出されるのである。

別れ話。

泣かせたらいい、わけなどない。女性を泣かせるのは良くないことだし、とんでもないことだ。男性は絶対そう思っているはずなのだが、無慈悲にも、彼らは大山に残酷な真実を打ち明けてくる。

そういうことが度重なり、彼女は確信した。自分の美が、すぐに飽きられてしまう程度のものである、ということを。それが美の追求開始の発端であった。

しかし整形美人となる前の彼女から、一度だけ、男性を振ったことがある。彼の名は大橋豊昭。作り変えられた自分ではなく、あるがままの自分を受け入れてくれた男性。

彼の何が不満だったのか。よく解らない。ただ、自分がひどく醜く思え、それに加え、母との死別、元彼によるストーカーなどが重なり、行き場のない不満を、彼にぶつけてしまったのだった。

自分でも、どうすればよかったか解らない。付き合ってきた男性の中でも、群を抜いて優しくて——悪く言えばお節介——マメな大橋豊昭を、どうして振ったのか解らない。

寂しい、とメールすれば、嫌な顔一つせず遠路遥々駆けつけてくれたし、深夜に電話をかけると、寝ぼけながらも精一杯明るさを滲ませた声で対応してくれた。

「大丈夫？」

大橋豊昭にも、よくこの言葉をかけてもらっていた。どうすればいいか解らず、塞ぎ込んでいると、温もりあるメールをよこしてくれた。そんな時、送られてくるメールには、顔文字が使われていて、少し嬉しかった。普段の大橋豊昭は、顔文字や絵文字を一切使わないのだ。無理して、自分を励ましてくれている。その事実だけで、彼女は満たされる、べきだった。

別れ際に、顔も見たくない、など残酷な言葉で、大橋を串刺しにしてしまった。大変後悔していたが、自分から言い出した手前、謝罪を口にするのはどうにも憚られ、今に至る。とはいえ、今、彼女の胸をときめかせているのは霊崎努だけなのだから、もはやどうでもいいといえばどうでもいい。

しかし、霊崎は一向に振り向いてくれない。
ああ、自分はなんて醜いのか。
そう嘆いていると、そんなことないって、と友人達は異口同音に答える。
恋愛とやらはもっと複雑で、論理的には説明しえぬところがある、とは察していた。しかし、自分の美が不足しているがため男性は自分を突き放すのだ、と一度思うと、不安でしようがなくなったのだ。簡潔に言えば、彼女は自信を完全に喪失してしまったのである。
自分が美しくなれば、自ずと自信も湧いてくる。たとえそれが、偽薬効果程度にすぎなかったとしても、である。いくら他人から大丈夫、大丈夫、と言われても、その時はやや安堵するものの、後々になってゆっくり考えてみると、疑心暗鬼が頭をもたげ始めるのだった。
足元に落ちている小枝を踏み折った。濁音のつく乾いた音が、森の中に少しだけ反響する。
不気味すぎるくらいに大きな静寂が腰を下ろすこの空間。早く抜け出たい。ここを降りれば、一山越えたことになり、ドラキュラ城が、眼前に姿を現すはずだった
「う……」
あまりに痛みが広がってきたので、彼女はポケットから痛み止めを取り出し、口に放り込んだ。
一息にそれを飲み干してから、ハイヒールでここに来るのではなかった、と後悔した。心なしか鼻に居座り続ける痛みも、増してきたような気がする。鼻を高くするべく入れたシリコンの位置が、ずれたのかもしれない。
もう自分は、そう長くないにちがいない。矮小な絶望の伸長が、幾度となくあった。この美しくもあり、継ぎ接ぎだらけの身体。パッチワークの存在。事実、今は大丈夫でも――今も大丈夫ではないのだが――後々、身体が崩壊してゆくこともあるという。
整形手術を受ける時、医者からリスクを説明されたこともあった。

でも彼女は危険を顧みず、美をつかむ手を放さなかったのだ。

※

陽光を徹底的に阻む森から抜け出ると、ドラキュラ城は目と鼻の先であった。しかしながら、いざ歩いてみると、なかなか辿り着かない。城が相当大きいがゆえに、近くに見えるのだろう。

太陽は、大変活気づいている。色素を抜いて、はっと息を飲むほどに白い肌も、この時ばかりは残念な役目しか果たさなかった。すぐに焼けてしまうのである。それを回避する方法はただ一つ、日焼け止めを塗り、上着を着ること。それしかない。しかし、熱い。夜とは正反対に、昼は大変熱かった。長時間歩いているのも起因しているのだろう。

忌々しくも額に光る汗をハンカチで拭い、彼女は口の中で唸った。少し焼けるような感触が、肌にある。美女というものになるためには、機能的な面を全て捨てなければならない。

彼女は手鏡を取り出し、笑顔を作ってみた。少し暗い感じの笑顔だった。うまく微笑むことができない。彼女は嘆息した。

ようやく辿り着いた。ドラキュラ城は実に荘厳な造りであり、見る者を圧倒する。岩壁を連想させる重厚な壁は、曇った白色を鎧っている。凄いの一言だったが、壁は所々剥落していた。長い歳月を生きてきた証であり代償でもある。最上階に鐘を備え、更にその上では、風見鶏が耳障りな音を奏でていた。錆びついているのだろうか、その動きはどこかぎこちない。

彼女は、ごくりと唾を飲み込んだ。果たして、自分がドラキュラの審美眼に適うのだろうか。

ドラキュラの判定を知るまで、彼女は己の美に絶対的な自信があった。社内外問わず、彼女が出歩けば、老若男女問わず、その目は

無意識の内に、この身に注がれるのだから。霊崎努を除いては、の話だが。
ぐだぐだと思い悩んでいても仕方ない。彼女は意を決し、扉を叩こうとした。
そう、あくまでも『叩こうとした』に、その動作は終わったのである。なんと、扉が自動で開いたのだ。思わず、一歩後退ってしまった。
「さすがドラキュラ城ね」
彼女は感心したと同時に、少し恐怖も感じた。もしかしたら、自分はここで殺されるのかも、という考えが、ちらと脳裏を過ぎったからだ。
しばし独りでに開いた扉を見ていると、扉は閉じられた。
「え？」
どういうことだ。もしや、ドラキュラお出まし云々以前の問題で、自分は美醜判定の段階にすら昇ることができなかったということなのか。
それでは、あまりにひどい。彼女は憤慨し、一歩前に出た。応じて、扉が開かれる。
「ま、まさか……」
彼女はちらつく疑問を抱えつつ、扉をくぐった。
そして、ある程度扉から離れてみる。扉が閉じられる。
近づく。扉が開く。
これは、自動ドアのようだ。物々しくもあり、神秘的な紋章が彫り込まれている扉の割に、やけに近代的である。これは、一体全体どうしたことだろうか。
『玄関ロビーにて、お客様がお待ちです。至急係の者は向かって下さい』
頭上で、女性による流麗なアナウンスが流れる。
何が起きているのか。もしかしたら、自分はドラキュラ城と別の城とを間違えたのかもしれない。いや、そうに違いない。彼女は確

信した。よもや、ドラキュラ城で、女性によるアナウンスが流れるはずがあろうか。
彼女が、よし、と頷き、自動ドアへ向かおうとした時だった。奥でベルが鳴る。次いで「一階、玄関ロビー前です。受付、当プールをご利用の方はここでお降りになってください」と、アナウンスが流れてきた。
慌てて振り返って、奥へ視線を向かわせると、そこにはエレベーターから降りてくる紳士が一人いた。先程のベルと音声は、どうやらエレベーターによるものらしい。
「やあやあ、待たせたね。マドモアゼル」
気さくに話しかける男性に、すかさず大山は、
「ごめんなさい。館を間違えました」
と言って、そそくさと退散しようとした。
「ここはドラキュラ城だ」
その男性が、にこやかに答えてくる。
ここがドラキュラ城とは大ボラ吹きもいいところだ。
真新しい詐欺め。
腹立たしいし、馬鹿馬鹿しい。
彼女は内心で憤慨した。というのも、この男性、シルクハットは愚か、内面が赤、外面が黒のケープすら着ていないのである。
その代わりに、彼は就職活動真っ只中の学生に近い服装を着ていた。

## 不況による苦行

「嘘でしょ？　あなたがドラキュラだなんて信じられない。あなたの服装は、まるでリクルートファッションじゃない。就活でもしているの？」

「うむ、最近まで就活をしておった。なんせ、近頃、世間の目は厳しい。いい歳して、いつまで部屋でこもっているのだ、と言わんばかりだ。おまけに、ニートなどという便利であり我が輩にとって厄介な新たな用語まで作り出す始末。仕方なしに、就活しておったというわけだ。そして、ようやく我が輩もニート脱出に成功したのだ」

ハッハッハッハッ、とドラキュラが高笑いする。

その姿、ドラキュラの欠片もない。目鼻立ちがすっきりしており、目はブルーサファイア、黒髪はしっとりしていそうで、かなりの長身、すらりとしておりスタイルも抜群である。容姿端麗という言葉が、ぴったりそのまま当てはまるのだが、それを除いては彼をドラキュラたらしめているものは何一つない。この館にしても、外観こそドラキュラ城なのだが、内部が妙に近代的なのが引っかかる。

『係の者が到着しました』

アナウンスの続きが流れる。

「うむ、まあ疑うのも無理はなかろう。ところで御主、ここへ何をしに来た――と形式的に問うてみようかの」

おそらくそのような問いかけは、もう何度も繰り返してきたのだろう。

「じゃあ、形式的に答えてあげる。私に不老を授けてちょうだい」

「ふむ……」

ドラキュラは顎に手をやり、大山を中心にして、円を描くようにしてゆっくりと歩き始めた。値踏みするかのような目つきは大変に不愉快だが、事実この男は品定めしているのだから致し方ない。

「よし、合格だ。御主はドラキュラが備えていなくてはならぬ美を

持ち合わせておる。ゆえに我が輩は、永遠の美を御主に授けよう。ただし、後悔するでないぞ？　ドラキュラは子を産めぬ。己は若いままであり続けるが、周囲は老いさらばえてゆく。ついには友人、知人、恋人、家族、誰一人としていなくなる。その孤独に、御主はたえられるか？」

ドラキュラが、ふっふっふ、と嫌らしげに笑う。自分は乗り越えられたが、お前はどうだかな、と見下したような笑いである。

彼女はムッとしたが、その過酷な真実を受け入れることなくして、永遠の美を得ることができぬ、という彼の理論が正当性を帯びていることを認識していた。

永遠の美、それは徹底した孤独との抱き合わせ商品なのである。それに通常の抱き合わせ販売とは違い、独占禁止法にも抵触しない。や、そもそも、ここは日本か、と彼女は変に法学的思考を展開している自分を恥じた。

「で、でも、あなたがドラキュラだなんて……信じてないんだから！」

この男がドラキュラでないのならば、無用な悩みも問答も不要である。

不要物で苦労することほど、馬鹿らしいものはない。彼女は、鼻で笑ってみせた。

「やれやれ、我が輩は本当のドラキュラだというのに。よろしい。ならば、その証拠をお見せしよう。御主、携帯なるものを持っているか？」

「え？　ええ」

「うむ、では、それをもってして我が輩を撮影してみよ」

ふふふふ、と大胆不敵な笑みを浮かべるドラキュラ。

最初、大山は彼の思惑をつかめなかったのだが、携帯電話を取り出し、構えたところで、理解した。

そして、撮影。おそるおそる携帯の画面を覗くと、そこにはその男の影も形も映っていないではないか。そう、もぬけの殻のリクル

ートファッションを除けば、そこには男が存在するという証拠が何一つないのである。
「これでも疑うかね？」
それはつまらぬ真似。
この超常現象を説明するには、彼がドラキュラである、ということでしか説明できない。
「よろしい。信じてもらえたようだ」
「え……ええ……じゃあ、私に永遠の美を？」
「うむ、御主は、ドラキュラに必須の洗練された美を持っておる。我が輩としても、御主には同族になってもらいたいところだが、先程の忠告は理解したのかな？」
大山は、彼の言葉を思い出した。
不老がもたらす不毛な苦労。
底深き苦悩。
愛する者だけが時によって風化していく不幸。
有象無象には、決して理解しえぬ苦業。
しかし、それでもいい。大山は下唇をきつく噛んだ。自身の身体が老いさらばえてゆけば、どうせ自然に身体が崩れていくにちがいないのだ。それならば、つかのまの幸福であっても、楽しまなくては損ではないか。
大山は厳かに頷いた。
目を細め、ドラキュラが満足げに頷いた。そして、近寄ってくる。
ついに、首筋に吸血痕のできる時が来た。それが時の風化を阻害するには不可欠な行為であると理解していながらも、ついつい大山は身構えてしまった。
「よし、では着いてきたまえ」
しかしドラキュラは、言葉を吐いただけだった。彼は踵を返し、エレベーターへと向かっている。
安堵と落胆が、彼女の中に降り立った。どうして今噛みついてこないのだろう。訝りながらも、彼女はドラキュラに続いて、エレベ

ーターに乗り込んだ。
ドラキュラは『Ｂ１』のボタンを押した。
エレベーターはなんの音も立てずに降下し、開扉と同時に、ベルの音、次いでアナウンスが流れた。
「地下一階です。保存室、製造室、塗装室、加工室をご利用の方はここでお降りください。また、塗装室、加工室を使用する方は、一階の受付にてその旨を申請してからのご利用となりますのでお気をつけ下さい」
ドラキュラは聞き飽きているのか、半ばそれを無視しながら、ずんずんと奥へ進んでいく。
あたふたと大山も続いた。なにせ、彼女は走れないのだ。少しでも遅れをとってしまうと、見失ってしまうかもしれない。
ドラキュラに追いついてから、彼女は辺りを観察してみた。
どうやら、ここは何かの研究所のようである。葉緑素を連想させる色の液体で満ち満ちた巨大なビーカーが、両脇にずらりと並べられている。そして、その中には人間が封入されていた。彼らは皆一様にして、穏やかな顔つきであり、美男美女であった。
「あ、あの人達は？」
「うむ、永遠の美を授ける工程で、あそこに入らねばならんのだ。いやはや、実に嘆かわしいことだ」
ドラキュラは振り返りもせず、大きく溜息を吐いた。
彼が言うには、永遠の美を授与するにあたって、かつては首筋に二本の犬歯を突き立て少しばかり血をすすれば良かったのであるが、これが近年において問題視されつつあるらしいのだ。
というのも、ドラキュラは多くの人間の生き血を飲むことによって、その生命を繋ぐのだが、あろうことかエイズというものが流行りだしたのである。そう、エイズの人間に噛みつき、その牙で別の人間を噛めば、もう結果は言わずもがな。
「いやはや、最近のドラキュラへの風当たりは強いものでな、だからこうしてあらゆる検査をし、御主の健康状態が良好であることを、

まずは確かめねばならんのだ」
　なるほど。ドラキュラにとっても、今の世の中は大変住みにくいものとなりつつあるらしい。
「解るよ、その苦しみ。どうして、世の中はこうなってしまったんだろうね」
「うむ、本当にその一言に尽きる。その上、電気代、ガス代、水道代も、人間諸君は我が輩に請求してくるのだぞ？」
　思わず、大山は「はあ？」と言ってしまった。日本語なのだが、ドラキュラにはそれでも十分に彼女の考えが伝わったようだ。
「御主ら人間はそれを至極当然のことと捉えておるようだが、ドラキュラにとっては死活問題なのだ。ドラキュラは働かぬ。そして、電気も水もガスも使わなかった。まあ、時たま水は使うのだが知れた程度よ。ゆえに、人間どもは水道代を請求してこなかった。無論、我が輩が怖くて請求できなかった、というのが主要因なのだろうが」
　リクルートファッションのドラキュラのどこに畏怖を覚えるのだろう。大山はそれを否定したかったが、今、ドラキュラの機嫌を損ねるのは得策ではない。そうね、と彼女は棒読みで同意した。
「近年のエイズ問題、ニート、といった問題が我が輩達にも降り注いできた。実にけしからん。ドラキュラは貴族なのだぞ？　働かなくてもよいのだ！　しかしながら、現実は厳しかった」
　大山が彼の顔を見ると、目に涙が光っていた。よほど苦労してきたらしい。
「ゆえに、新卒を相手取っての大戦争をせざるをえなかった。既卒の我が輩は――しかも遙か昔だ――面接ではそのことをよく聞かれたものだ。今まで何をしていたのか、とな。
　だが、どうにかこうにか就職でき、そして仕事の関係上このような大がかりな装置を自作したのだ！」
　ドラキュラが、大仰に両手を上へ向けた。
「なんとか世間からの激しい批判から回避できた、と思ったのだが、いかんせん、我が輩の会社が経営不振らしくての、なかなか給料が

振り込まれないのだ」
今度は、肩をがくりと下げ、うなだれてみせる。
「それがゆえ、電気代、ガス代、その他諸々の経費を支払うのが厳しいのだ」
それからも、ドラキュラの不平不満が続々と群れをなして溢れてきた。人間が引き起こしている環境問題は大変迷惑だとか、ドラキュラ城に抵当権を設定し借金しようとしても、この物件には価値がないと言われたりとか、愛妻のカーミラに離婚され現在財産分与請求権を行使されているとか、かなり中年臭い愚痴になりつつあった。
「よし、着いた」
ここがどうやら検査第一工程のところであるらしい。所狭しとカプセルが転がっている場所である。カプセルは下半分が青色、上半分が透明であり、中に人間が一体、そして説明書が封入されている。
「えーっと、待ちたまえ」
ドラキュラが山のように積まれたカプセルそっちのけで、傍らにぽつんと置かれている古めかしいパソコンを機動させ、何やら調べている。
「ではでは、むむむむっ！　な、なんということか！　なんたることか！」
ドラキュラが頭を抱え、悩ましげに低く唸る。
「何か問題でも？」
「うう、うむ、大ありだ、大ありだ！」
ドラキュラが、パソコンを拳で軽く叩き、そして大山をじっと見つめた。
「実はな、我が輩には、御主にまだ説明しておらぬことがあるのだ」
「え？　な、なに？」
嫌な予感がする。大山は一歩後退したが、ドラキュラは一歩詰め寄ってきた。
「説明するのも面倒だ。仕方ない。許せ、とは言わぬ。せめて恨んでもらいたくないものだ」

ドラキュラはそう言ったかと思うと、大山に息を吹きかけ、卒倒させた。

## ダブリまくり

「やれやれ、あまり『息吹』は使いたくなかったのだが」
崩れるようにして倒れた大山。とんでもないことになってしまった。しばし彼女を見つめ、それからドラキュラはモニターに表示されている情報を再確認した。
この仕事を始めて、早いもので一年。ドラキュラの噂を聞きつけて、美男美女が来るのは今に始まったことではない。そこに目をつけ、このドラキュラは彼らを利用することに決めたのだ。そう、美男美女をフィギュア化するという職業に。
ドラキュラは、その首筋に噛みつく。次に、ここにある特殊な機械によって、カプセルに入る大きさにまで圧縮する。圧縮の原理は実に複雑だが、簡潔に述べてみると、以下のようになる。
ドラキュラが噛みつく際に彼らの体内に侵入した唾液の成分の性質を、美男美女の身体を圧縮する、というものに変えるのだ。性質を改竄された唾液は、衣類や装飾品にも浸透し、そして縮小させる。
次いで別の機械で、今度は彼らの思考の大半を停止させる。うっかりここでのことを喋られようものなら、ドラキュラは完全失業者になってしまう。しかし、ここで肝心なのは完全に黙させてしまってはあまりいただけない、ということである。僅かに反応したり、喋ったりするからこそ、このフィギュアは人気が高いのである。
「はあ……我が輩、ここに来るまで大変長い道のりであったぞ」
この一連の作業を円滑に運ぶようにするには、相当苦労した。タクシードライバー、近隣の人間、それら全員を買収しなくてはならないのだから。
とはいえ、一つだけ問題があった。それは、ダブリという現象である。いくら美しいフィギュアになりうる存在であっても、ダブリすぎては商品価値がおそろしく低下してしまう。当然、ある程度同種のフィギュアが必要なのは必要なのだが。

「それにしても」
ドラキュラは改めてモニターを確認した。今日来た日本人女性のタイプは、すでに百体ほど保有している。てっきり九十体くらいだとばかり思っていた。さすがに、百一体目は要らない。別の倉庫には、もっと在庫があるのだから。しかし、どうしたものか。
本来ならば、玄関ロビーにて、ドラキュラの記憶によるダブリ追っ払いが行われるのだが、今日は勘違いしてしまった。己の運どころか、いよいよ、頭の方も駄目になりつつあるらしい。
彼女は、この館の秘密を知ってしまった。第一、殴打してしまったので、警察を呼ぼうにも呼べないし、呼んだら呼んだで、千体を超える美男美女監禁罪を問われかねない。
「ううむ、どうしたものか。ダブリは今に始まったことではないのだが。しかしなあ、最近、どうにも似たような容姿が多くて困る。我が輩のように個性的かつ美しい者は、今の世の中には一人もおらん。皆、どこかしら似ているし、ファッションもさして違わぬし、なんといっても顔がどこか作り物臭い……」
しかし、ノルマは達成せねばならない。近頃、『いつでも調子いいが常識』を標榜とする上司が新商品をもっとかき集めてこい、と喚き立てているのである。
妻と離婚したてほやほやで、鬱憤がたまっているのだろうが、その怒りの矛先をこちらに向けられてはたまったものではない。それに、離婚でもめているのは、こちらも同じなのだ。その上、血も涙もない財産分与請求権さえ行使されているというのに。
新商品。緊張してきた。
しかしながら、上司が新商品を求めるのも頷ける。このフランス人形もどき諸君の横行には、ほとほと呆れさせられるものがある。今や世界には六十数億人もいるのだから、単純計算しただけでも、よほどのことがない限り、似たような顔というのは産まれないはずなのだが。

――何度言ったら解るんだ、このウスノロ！　もっと味わい深い、自然と調和した感じの人間を見つけてこい！

上司の言葉を思い出し、ドラキュラはぶるぶると震えた。かくなる上は、もはや加工室と塗装室を使う他あるまい。

あそこで、この百一体目の人間を改良する以外に、ドラキュラが上司による罵倒を避ける手段はない。

初めてのことで、心配だが、心配してばかりいても何も始まらない。せっかくニート脱出に精巧したのだ。クビにでもされたら、もう目も当てられない。

ドラキュラは新商品開発に身を乗り出した。加工室、塗装室を使うのは初めてだ。何かと不安要素が残るけれども、後退はありえない。やるかやられるか、なのだから。

## 原形動詞同士

身体を引き裂かん勢いの激震。
それによって、精神が撃沈。
ありえないまでの未調整の衝撃が襲いくる。
あまりに窮屈な部屋に、彼女は押し込められている。背中にごわごわした感触があった。触ってみると、どうやらそれが紙である、ということはなんとか解る。何が書かれている紙か。確かめたかったが、そこまで身動きできないし、第一思うように動けない。身体が麻痺しているかのようだった。
ここはどこだろう。大山は、自分を覆う存在を見てみた。球形であり、上部が透明、下部が青色、ということだけ解った。
「なんなんだろ、これって、まるで――」
ガシャポンみたい。
言いかけて、大山は周囲を見た。すると、なんということか、頭上、いや大山の周囲には、無数のカプセルが積まれていた。無論、その中の一つ一つに、美男美女が封入されていることは言わずもがな。
しばし大山は自分の置かれている状況と、記憶が途切れるまでのことを思考し、欺罔されたことに気づいた。
あのドラキュラ、これが商売だったのだ。なんということだろう。自分はドラキュラの商品だったのである。せっかく磨き上げた美も、これでは活用できない。
狭いことこの上ない空間で、溜息を漏らした時、またも周囲が激動する。視界が反転し、感覚も非日常へと落ちてゆく。
激しく脳を揺さぶられ、大山の思考は混濁し、天地も解らぬ体であった。やがて平穏が訪れるも、それは束の間の安息。鼓膜を突き刺す音が、上部の崩壊を引き連れて出現する。
自分はこれからずっと小人のまま、見ず知らずの人間の玩具にな

るのだ。
飾られるのならば、まだいい。もしダブッているなどと言われ、即座に捨てられたりしたらどうしようか。
安堵の息を吐く権利すら剥奪された大山は、天を仰いだ。自分を買ってくれたのは誰だろう。
巨大な指が、彼女をカプセルから丁寧に取り出す。彼女は、掌で転がされていた。反抗しようとしたが、動けない。痺れが残っているのだ。しかし、じょじょに彼女は麻痺の喪失を覚えた。
今なら動ける。えいやっとばかりに彼女は動き、巨大な掌から転げ落ちた。
硬い道路に身体を打ちつけたが、どうということはない。アリがその軽い自重がゆえに、高所から落下しても平気なのと同原理なのだろうか。
疑問を感じていると、身体に急激な変化が訪れた。なんと、見る間に身体が膨張してゆくではないか。
視界に存在する全てが縮小してゆく。それにつれ彼女は大きくなり、ついには元の大きさに戻った。
身体を動かしてみた。何かおかしい。なんだろう。いいや、おかしくなどない。少しもおかしくはない。だからこそ、彼女は違和感を覚えていたのだ。
そう、身体に馴染み深い痛みや違和感が、すっかり失せていたのである。どういうカラクリなのか解らないが、それでよかった。彼女は、胸がすっとするのを覚えた。
手を動かすと、円滑に動いてくれた。少し周囲を駆けてみると、走るとはこういうものだったのか、と思い出すような感覚があった。
しばらくはしゃぎ回った後、彼女は、自分の購入者を見てみた。
「あ」
声が重なった。大山の目の前にいたのは、霊崎努その人だった。
「君は？　君は誰？」
「え？　私は、大山だけど……」

あまりに心外だった。いくら自分を美と認識していなかったとしても、顔くらい覚えているだろうに。
「だって、その髪、全然大山さんらしくないよ」
失礼ね、と言い、大山はバッグから手鏡を取り出し、驚いた。そこに映っているのは自分であり自分でなかった。
未加工の自分が、見つめ返している。気が遠くなるほどの時間と金をつぎ込んだというのに、得た結果全てが水泡に帰してしまった。
「まあ、いいや。とにかくさ、君、大山さんの名を騙るのはやめなよ」
霊崎の言葉は、半ば意識と重ならなかった。ずれてしまい、意味のほとんどがこぼれ落ちてしまっている。
「しっかし、これが新商品とは驚きだなあ」
霊崎努が、フィギュアとともに入れられている説明書を、しげしげと眺めている。そこで、大山の意識が明確化した。慌てて彼女はそれをひったくり、そして見た。

新シリーズ。素朴な味わい。自然美の追求。

あろうことか、加工済みの自分は更なる加工を受けたらしい。
数学的に言えば、元の位置から三百六十度変わってしまったようなものである。
首筋を触ってみたが、噛まれた痕はない。衰弱せぬ美は得られなかった。代わりに、酷い仕打ちだけが残された。
「ねえ、君、本当の名前は？」
霊崎努が珍しく、自分に興味を持ってくれている。社内では、このようなことは決してなかったのだが。ひょっとして、これは好機なのかもしれない。
胸の内を、さらけ出してみよう。英語の動詞でいえば『原形』となった今、彼女には否定される美など断片すらない。想いを伝え、結果として拒絶されたとしても、己の全人格を踏みしだかれるおそ

れはないのだ。
深呼吸してから、彼女は今まで閉鎖していた想いを伝えてみた。
霊崎努は少し驚いたようだったが、かぶりを振った。
「駄目なんだよなあ。一歩先に進んでいる人じゃないと駄目なんだ」
「……え？」
「人工的な美男美女の次は、きっとこの手のものが来るんだろうと思っていたんだ。だから、僕はこんな姿だけど、これは先を見越しての計算さ。さあて、次はどういった感じのが流行るのかなあ」
霊崎の口調は実にのんびりしていたが、大山は理解できず、目を白黒させていた。
「大丈夫だって。君が大山さんだってことくらい、雰囲気で解るよ。僕を好きということもね。でも、それだけじゃ、僕は君に関心を向けないよ。もっと先を見越してなきゃあ。見飽きたフィギュアのような人間になるなんて、芸がないね。さあて、そろそろ整形しようかな」
うーん、と霊崎が伸びをしてから、顔をしかめ、背をさすっている。
「あ、あなたも整形していたの？」
素朴な青年、霊崎が整形をしているとは到底思えない。それに、美しい、格好いいという雰囲気とは無縁の彼が、一体どこをどう改良したというのだ。どうにも解せない。
「ま、ともかくさ、美を求めるのは大変だってことだよ」
過去完了形、過去完了進行形、過去形、過去進行形。
現在完了形、現在完了進行形、現在形、現在進行形。
未来完了形、未来完了進行形、未来形、未来進行形。
英語の時制のごとく、容姿を安易に変えることは、愚かなことなのかもしれない。しかし、結局、僕達は原形に戻らなければならない。
謎めいた言を吐き、彼は去ってゆく。
「ちょ、ちょっと待って！」

言うと、霊崎は軽く右手を挙げて、こう答えただけだった。
「身体は、いくらでも変えられる。でも、心はどうかな？　それにね、君は進行形とかじゃなくて『原形』のままの方がいいよ。美に執着して心身を砕いていくのは、僕一人だけで十分さ。君は、ＴＯの後ろにい続けさえすればいいんだよ」
「待って！」
彼女は追いかけようとしたが、ふいに彼は消失していた。
何が起きたのか。目をぱちくりさせる彼女。

――君は、ＴＯの後ろにい続けさえすればいいんだよ

ＴＯ――Ｔ・Ｏ――豊昭・大橋――大橋豊昭。かつて感情に任せて、捨ててしまった男の名である。
「あるがままの私を受け入れたあの人と……一緒にいろってことなの？　ねえ、教えてよ、霊崎君」
しかし、答えは返ってこない。代わりに、冷たい風が大山をなでるばかりだった。

## 原形動詞同士（後書き）

ネタバレなしの後書きなので、ご安心を。

男女の思考はとてつもなく違うように思える。や、思えるどころか事実そうなのであろう。男は女に比して、腕力、つまり物理的能力に長けている。だから、女は劣る物理的能力を精神面で填補しようとしているのではなかろうか。そう考えると、色々と合点のいくところがある。

表情からその人の感情を汲み取る能力も、女性の方が圧倒的に優れている。運命を信じてしまう女性が多いのも、自分の直感に自信があるからなのだろう。対して、男性は精神面をそこまで磨いておらず、自分の直感はあまり信じていないから、運命はあまり感じないし、信じない。

さて本作は、飽くなき美の探究に命を懸けた女性の物語である。ここまでくると、一種のトラウマなんじゃないか、と思えるが、でも多くの女性は基本的にそうなのでは、と思ったので、書いてみた。女性は男性のことをよく単純などというが、女性もそうだろう。褒められたら異様なまでに喜ぶし、外面を磨きまくっているのは内面に自信がないことの裏返しともとれる。男性が人知れず努力している姿に惚れ込みがちなのも、他者への評価をもらえずとも努力できる、つまり女性にはない男性特有の自己内部に存する確固たる価値観に惹かれているのである。主人公大山は、そういう女性の典型として捉えて欲しい。しかし、結局、彼女が得た解答は――

ネタバレになるから伏せるが、こういうことなんじゃないか、と考えているので、そういう方向に持っていった。何が正解で、何が不正解かなんて決まっているわけではないが、こういう考え方もあるんだな、と読後に感じ取ってもらえれば幸いである。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1446g/

---

ガシャポン彼女

2010年10月8日15時17分発行